

変化結果を表す *in/into* 前置詞句の交替について

江口 巧

1. 序

小野 (2011)で指摘されているように、状態変化動詞の用いられた「本来的結果構文」(影山 (1996)) (用例((1))では、行為動詞の用いられた「派生的結果構文」(用例(2))と異なり、結果句には変化結果への過程を明示する *into* 前置詞句ばかりでなく、*in* 前置詞句も生じることができる。

(1) John broke the stick {*in/into*} pieces. (小野 (2011: 131))

(2) John pounded the metal {**in/into*} pieces. (小野 (2011: 131))

しかし、(3)のような位置変化を内在する状態変化表現では、*in* 前置詞句は顕著に用例が少なくなる。

(3) John broke the egg {*?in/into*} the bowl.

本発表は、このような変化結果を表す *in/into* 前置詞句の容認性の違いを左右する要因が、前置詞句のもつ意味概念が動詞が本来有する意味論的情報に由来するものか、あるいは語用論的情報に由来するものかであり、後者の場合には *into* 前置詞句の要請が強くなることを主張するものである。

2. *in/into* 前置詞句の認可条件

まず、上に見た(1)における主動詞 *break* は、その語彙概念構造(以降 LCS)に変化結果が記載され(影山(2005))、*in/into* pieces は、動詞のもつ「状態変化」の意味を詳述する(*further specify*)機能をもつとされている。故にこれらの前置詞句は動詞が本来有する語彙の意味に由来していると言え、この場合、*in/into* とも容認される。

同様に動詞 *cut* を考えると、これも状態変化動詞に近い位置づけがなされ、切断後の対象物の分離した状態や形状を意味論的に含意(*entail*)している。

(4) She cut the meat {*in/into*} slices.

(5) He cut the paper {*in/into*} different shapes.

(6) She cut the paper {*?in/into*} a circle/triangle.

従って、これらの用例における前置詞句もすべて動詞の意味を詳述していると言える。(6)の *circle* や *triangle* になると、*into* に比べ *in* の用例数は相対的に下がるが、それでも *circle* や *triangle* はそれ自体の意味として特定の形状を表しているため、これらの前置詞句の意味は動詞から意味論的に導かれているとみなして差し支えない。

次に(7)において、主動詞 *pound* は打撃動詞であり、*into* pieces が表す状態は動詞の LCS には記載されていない。

(7) John pounded the metal {**in/into*} pieces. (= (2))

このことは(8)の容認性を見ればわかる。

(8) John pounded the metal, but it did not break.

たたく行為の結果生じる状態は LCS ではなく、その達成を意図された行為であるならば、影山(2005)の提示する動詞のクオリア構造の「目的役割」に含まれる情報に由来すると考えられる。影山はこのような情報は、LCS に含まれる情報とは異なり、語用論的情報と見なしている。そしてこの場合、*in* 前置詞句は容認されない。

次に(9)の議論に移る。

(9) John broke the egg {*?in/into*} the bowl. (= (3))

(9)が描写する事態は、例えば日本語で複合動詞「(卵をボウルに) 割り入れる」が可能なことから、関与する二つの行為が緊密性の強いひとまとまりの事象ととらえられている証拠になりうるが、それでも *into* the bowl は状態変化動詞 *break* から意味論的に由来したものとは言えず、江口 (2019) で論じられた通り、我々を囲む世界で起こる諸事象に関する知識の総体である「シナリオ」(特にここでは調理に関する「シナリオ」)という語用論的要因によって動詞と関連付けられているとみなすべきである。そして、この場合 *in* の使用例は相対的に少なくなる。

他の検証事例として、以下の(10), (11)を考える。(10)は *in/into* ともに、(11)は *into* のみが容認される。

(10) He tore the paper {*in/into*} two halves.

(11) He tore the shirt {**in/into*} bandages.

(10)の *in/into* two halves は、言うまでもなく、状態変化動詞 *tear* が表す行為の結果の対象物の分離した状態を詳述している。一方(11)では、(10)と同じ状態変化動詞 *tear* が用いられているという理由でこれを本来的結果構文とみなし、小野(2011)の見解をそのまま適用すると、*in* も容認されることになり、事実と矛盾が生じる。(11)の *into* bandages (包帯にする) については *into* two halves と異なり、引き裂かれたシャツの特定の用途を表しており、こ

の情報 *tear the shirt* という行為の「目的役割」に記載された語用論の情報という見方を取るのが妥当である。

また、(11)に描かれる事態は、「彼はシャツを引き裂いて包帯にした」という訳語からわかる通り、少なくとも日本語母語話者にとっては、この事態は連続する二つの異なる事象として概念化される（このことは、「*彼はシャツを包帯に引き裂いた」が非文であることから伺える）。一方、英語ではこれをひとまとまりの事象として一つの節内にコード化することが可能であるが、ここで重要な役割を果たすのが *into* である。この前置詞は、二つの事象間の推移(transition)を明示する働きをするが、ここでシャツを引き裂くという行為事象を、シャツが包帯になるという変化結果事象に関連付ける際、後者が前者から語用論的にしか導かれない、いわば“概念的に隔たり”のある事象であるため、二つを関連付けるには、推移の経路を明示する *into* が必須となる。この場合、変化経過ではなく、結果状態のみを明示する *in* ではこの役割を十分に果たすことができないのである。

さらに本発表の主張を裏付ける例として、以下の例を挙げておく。

(12) She folded paper {in/into} two.

(13) She folded paper {in/into} shapes like

(14) She folded paper {*in/into} a crane.

動詞 *fold* は行為の対象物の折られた後の状態を entail しており、このことから、(12)、(13)のように、折る行為の結果の対象物の状態・形状を表す表現は主動詞が表す意味を詳述していると言え、この場合 *into* ばかりでなく、*in* も容認される。ところが、(13)のように形状を明示する *shape* のような表現は容認される一方で、(14)における *crane* のように具体的に折り紙で作る事物となると、もはや *in* は容認されず、*into* でなければならない。ここでは、*fold paper* から *shape* は意味論的に導かれるが、*crane* のような具体的な事物は、折り紙に関する我々の世間知に基づく語用論の情報に由来するものと言わざるを得ない。

以上、主動詞に後続する前置詞句が表す変化結果が動詞の語彙的意味に由来するものである場合、*into* のみならず、結果状態を表す *in* も容認される一方、動詞から語用論的に導かれる情報の場合には、*in* は許容されにくく、動詞が表す行為から結果状態への移行を明示する *into* の要請が高まることが確認されたと思われる。

3. *in* 前置詞句のさらなる認可条件

上の議論によれば、変化結果を表す *in* 前置詞句が容認されるためには、少なくとも文の主動詞がその LCS に変化結果が記載された状態変化動詞であることが最低の必要条件になってくる。この立場では、文における状態変化の表出は動詞が担うため、後続する前置詞は変化結果への移行を明示する *into* 前置詞である必要は必ずしもなく、単に結果状態そのものを表す *in* であっても容認されるということになる。ところが、このようなアプローチでは、変化結果を表す二つの交替形である *in/into* 前置詞句には実質的に機能の違いはないということになる。しかし、本発表ではこのような見方は取らず、二つの前置詞は形式が異なることからそれぞれ独自の意味機能を持ち、*in* はあくまで変化結果としての状態を、一方、*into* は変化結果に至る経路を明示するという立場をとる。

このような見方を取る理由は二つあり、まず、結果状態の解釈が要求される(15)では、*in* のみしか容認されないのに対し、対象物への働きかけの行為が継続し、変化の過程に焦点があてられた(16)では、*into* との相性がよくなるという事実である。これは、変化結果を表す *in* と *into* とで差異は生じないという想定では説明がつかない。

(15) The broken vase was left {in/*into} pieces for hours without being swept away.

(16) He broke one vase after another {??in/into} pieces.

今一つは、例えば動詞 *turn* が *turn A into B* という形式（「A を B に変える」）をとる場合、*into B* の意味は、(使役)状態変化を明示する動詞 *turn* から必然的に導き出せるにもかかわらず、ネット検索の結果、例えば *turn something into energy* は多数の用例が見つかる一方で、これと同じ意味で *turn something in energy* は1件もヒットしなかった。このことは、*change A into B* についても同様であった。このような事実を受け、本稿の事例で *in* 前置詞が容認される事例を再度確認したところ、(紙面の都合上、詳細な例の提示は省略するが) いずれの例においても、*in* 前置詞句はそれ単独で状態そのものを表す表現として生起可能であるという事実が判明した。一方で、*in* 前置詞句が容認されない例ではそれが不可能であった。このことから、変化結果を表す *in* 前置詞句の認可条件としては、2節で提示した条件に加え、単独で状態表現として生起可能であることが必要になると言える。

主要参考文献

江口 巧 (2019) 「位置変化を内在する状態変化表現」『英語英文学論叢』第 69 集, 1-22.

影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム』No.1, 影山太郎(編), 65-101, ひつじ書房, 東京.

小野尚之(2011)「英語結果構文の固有性と類型的特性」*JELS* 28, 129-135, 日本英語学会.